様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月 ２３ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０５５６５

研究課題名（和文）地域完結型医療のためのケースメソッドを用いた協働型家族看護研修プログラムの構築

研究課題名（英文）Development of a cooperative family nursing training program using case methods for community-based health care

研究代表者
山崎　あけみ（Yamazaki, Akemi）

大阪大学・医学系研究科・教授

研究者番号：９０２７３５０７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,400,000円

研究成果の概要（和文）：以下の３つの研究成果を提示する。
①申請者らとともに、継続して家族看護研修を実施してきた医療施設に勤務している中堅看護職の家族看護態度（FINC-NA)に関連する要因は、看護実践力・職場満足・家族ストレス対処力（FSOC)であった。看護実践力を介して間接的に家族看護態度に影響を与えている要因は、職場満足・FSOC・管理職経験・家族看護学習経験であった。②対応困難な家族への支援のため、多職種・多施設の専門職が協働し研鑽する際、必要な４要素が明らかになった。③地域に密着して継続的に看護職と多職種・看護系大学教員・住民とともに、家族支援の連携ケース検討会を開催し、その運営方法について一定の提案をした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果には、主に次の２つの意義がある。医療施設の看護職自身による現場のケースを用いたケーススタディという研修方法をいくつかの医療施設に定着させ、そこで働く中堅看護職にとって、家族看護学習経験は家族看護態度になんらかの影響があることを報告した。また、このケーススタディという方法を医療施設内に留まらず、地域密着型で看護職・多職種・市民などで行う、連携ケース検討会という形に発展させた。例えば、AYA世代の小児がん子ども・家族の連携ケース検討会は、静岡県立こども病院・静岡がんセンターおよび近隣の訪問看護ステーション・クリニックなどの構成メンバーにより研究期間終了後も継続して実施している。

研究成果の概要（英文）：We present the following three research results.
①This study was to clarify the attitudes of nurses working in medical facilities towards family nursing and the related factors. Multiple regression analysis with FINC-NA as the dependent variable revealed significant regression coefficients for nursing practice ability, FSOC and job satisfaction. Moreover, path analysis with nursing practice ability as the dependent variable showed job satisfaction, FSOC, managerial experience, family nursing learning experience were significant. ②Diligent study through collaboration between professionals in multiple disciplines across multiple facilities revealed four elements necessary to help families that are difficult to handle.③We offered a standardized proposal in four communities regarding how nurses and nursing college faculty can collaborate with other disciplines and members of the community to host case conferences for family care and discuss how these conferences should be run.

研究分野：医歯薬・家族看護学

キーワード：家族看護　現任教育　ケーススタディ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

看護職への継続教育の必要性は古くから周知され、その方法は議論されてきた。なかでも、知識付与型の教授法では身につかない、看護の実践と理論のギャップを埋める正解のない思考過程の訓練には、現場のケースを分析することの有効性が論じられてきた[1)-3)]。家族看護も、例えば Wade らは困難家族について実際のケースを用いた教育効果を提示している[4)]。本研究は、初級（家族像理解のグループワーク）中級（家族看護実践のケーススタディ）上級（連携ケース検討会での討議）という 3 段階の研修を組み立てるためにケースメソッドを方法論として用いる。即ち、①現場でのケースが教材、②受講者は学びの主体であり、③企画運営者は教えるのではなくあくまで支援、そして、④知識付与が目的ではなく、現場で生じている問題について考え抜く能力や態度の獲得をする思考訓練としてのプログラム構築を目標とした[5)]。

申請者らのこれまでの研究の質的データでは、【家族は看護の対象であるという組織風土】【患者は家で生活するものという信条】【家族に役立つ実践をしたという成功体験】【家族への実践を先輩スタッフから学び・教える関係】という要因が、スタッフの家族看護実践を育む上で必要という結果であった[6)]。従って、第一に、実践での成功体験のためには家族看護の研鑽には、集合研修など（Off-JT）だけではなく、業務の中で家族に接し実践したことを分析して学ぶ(OJT)こととの併用が望ましい。第二に、管理者・スペシャリスト－ジェネラリスト（中堅層）の間で、教える－学ぶ相互作用を生む協働型教育システムの構築が、組織風土およびスタッフ間の学び・教える関係も育むと考えた。

地域完結型医療の観点からの申請者らのこれまでの研究の量的データからは、家族看護研修への取り組みがなされているのは、病床数が多く、教育担当師長等が専従で、かつ退院支援部門に看護師配置のある施設であった[6)]。また、質的データからは、円滑な退院調整により在院日数を削減させるため、看護職に家族対応を訓練させたいという意向は、どの看護部も焦眉の課題であることが伺えた。以上の結果を受けて、本研究における研修とは、医療施設での院内研修に留まらず、定期的に地域密着型で医療施設内に留まらず多施設・多職種間での連携ケース検討会の企画・運営方法も視野にいれることにした。

２．研究の目的

① 申請者らともに、家族看護研修のグループワーク、ケーススタディを継続的に実施している医療施設の中堅看護師を対象として、家族看護態度に関連する要因を明らかにする。

② 地域完結型医療の担い手として、家族をアセスメントし介入することができる人材育成のため 病院内研修に留まらず、地域の保健医療福祉に関わる多職種・多施設の専門職が、家族支援について協働で研鑽する場に必要な要素の構成概念を探索する。

③ 看護職が多施設・多職種で協働しながら、様々なニーズにあった地域密着型の連携ケース検討会を構築し、その企画と継続した運営を可能にする指針を提案する。

３．研究の方法

① 家族看護研修を申請者らと実施している医療施設のうち同意の得られた 7 施設の臨床経験 5 年以上の中堅ナースを対象に無記名自記式質問紙調査を実施した。家族看護態度に関連する要因として、施設的要因・個人的要因・専門家としての要因があるという概念枠組みを先行研究から構築し、各要因を測定できる項目を検討の上調査用紙を作成した。分析は、全変数の記述統計量を算出し、家族看護態度に関連する要因をパス解析で分析した。

② 対応困難な状況にある家族が地域で自立して生活することを目標に支援し、施設内外で事例検討会に参加した経験のある病院や地域の保健医療福祉施設に勤務する臨床経験 5 年以上の専門職 15 名に半構造化インタビューを実施し、質的帰納法的に分析した。

③ 研究分担者・研究協力者が所属する医療施設とその地域において、地域密着型・困難な家族についての連携ケース検討会の企画・運営を行い、定期的に検討し、関連する学術集会において報告と討議を行った。

４．研究成果

7 病院の中堅看護職 638 名に調査票を配布し、480 名（回収率 75.2%）から返送が得られた。7 施設の対象者数は 20～113 名（回収率 52.6～94.7%)平均年齢は 33.7～39.8 (SD=6.5～9.1）歳、平均就業年数は 11.0～16.2 (SD=5.8～8.6) 年であった。家族看護態度尺度「Family Importance in Nursing Care-Nurses' Attitudes 以下 FINC-NA」を従属変数として重回帰分析を行った結果、決定係数は R^2＝0.309 (p<0.01) となり、看護実践力(β=0.442, p<0.01)、FSOC(β=0.187, p<0.01)、職場満足(β=0.104, p<0.05) が影響していた。続いて、最も影響力が強い看護実践力を従属変数として重回帰分析を行った。その結果、決定係数は R^2＝0.195 (p<0.01) となり、職場満足(β=0.284, p<0.01)、FSOC(β=0.215, p<0.01)、管理職経験(β=0.134, p<0.05)、家族看護学習経験(β=0.118, p<0.05) が影響していた。さらに、職場満足の FINC-NA に対する直接効果は β=0.104 であるのに対し、看護実践力を媒介する間接効果は β＝0.126 と直接効果よりも高かった。同様に、FSOC の FINC-NA に

対する効果を見てみると、直接効果は β=0.187 である一方看護実践力を媒介する間接効果は β=0.095 となり、直接効果の方が高かった。詳細は、5．主な発表論文等、Hori,2020; Nakayama, 2019; 隍, 2019 また学会発表 Sou, 2020; Yamazaki, 2019; Hori, 2018; 隍,2018; Nakayama 2018 で報告した。

インタビューの対象者は、保健医療専門職 15 名、（看護職 10 名、医師 2 名、精神保健福祉士 3 名）年代は 30 歳代 4 名、40 歳代 7 名、50 歳代 4 名、平均インタビュー所用時間は 54.6（30－84）分であった。必要な要素として、1）現代の家族の特性や問題の共有、2）家族支援に必要な視点と技法、3）家族支援を意識した現任教育、4) 視点の違いや多様性を知ること、5）協働・連携への関心と理解が挙げられた。詳細は、5．主な発表論文等、木村, 2019 また学会発表、木村, 2017 で報告した。

申請者らは院内のリソースナースによる３つの家族看護研修プログラム（グループワーク、ケーススタディ、地域密着型連携ケース検討会）を開発してきた。うち地域密着型連携ケース検討会について 4 段階での構築が示唆された。即ち、①施設・業種を超えての家族看護の観点を盛り組む連携ケース検討会の目的・到達目標の設定、②開催までに企画・運営を担うコアメンバーによる共通理解の確認、③開催当日、家族ライフサイクルを経時的にジェノグラム・エコマップを描きながら（家族看護の視点からかかわる）ファシリテータの配置、④評価を行い次回につなぐ、である。地域は、静岡市、東京都荒川区、和歌山市、大阪市において実施し、5．主な発表論文等、山崎, 2018; また学会発表 津村, 2019; 津村, 2018; 津村,2017 で報告した。

＜引用文献＞

1） Arrie, M. & Caballero, S. (2015). Teaching skills to resolve conflicts with acute confusional syndrome patients in nursing using the case method (CM). *Nurse Education Today*, 35:159-164.
2） Forsgen S, Christensen, T., & Hedemalm, A. (2014). Evaluation of the case method in nursing education. *Nurse Education in Practice*, 14:164-169.
3） Popil, I. (2011). Promotion of critical thinking by using case studies as teaching method. *Nurse Education Today*, 31:204-207.
4） Wade, GH (1999). Using the case method to develop critical thinking skills for the care of high-risk families. *Journal of Family Nursing*, 5(1):92-109.
5） 山崎あけみ，峰博子，亀山花子（2014）現任教育で家族看護をいかに教えるか‐家族看護のケーススタディ研修という方法論．家族看護，12(2):138-147.
6） Yamazaki, A. (2014) Fundamental factors related to continuing education in family nursing in Japan: A mixed methods approach. *Journal of Nursing Education and Practice*, 4(1): 247-257.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 木村，千里 ； 山崎，あけみ ； 武用，百子 ； 峰，博子 ； 津村，明美 ； 菊池，良太	４．巻 24(1)
２．論文標題 多職種・多施設の専門職が家族支援において協働で研鑽する場に必要な要素	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪大学看護学雑誌	６．最初と最後の頁 10－17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/search/200050020498/?lang=0&cate_schema=3000&mode=0&disp=back&codeno=jour	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 隍，智子 ； 菊池，良太 ； 山崎，あけみ	４．巻 25(1)
２．論文標題 家族看護実践に影響を与える要因に関する文献検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 大阪大学看護学雑誌	６．最初と最後の頁 89－95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/search/200050020498/?lang=0&cate_schema=3000&mode=0&disp=back&codeno=jour	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山崎あけみ・津村明美・武用百子・峰博子・木村千里	４．巻 20(4)
２．論文標題 家族看護の視点を交えた事例検討会の進め方とそのポイント	５．発行年 2018年
３．雑誌名 コミュニティケア	６．最初と最後の頁 68-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Hori, M., Yamazaki, A., Soeda, A., Odatsu, K., Buyo, M., Matumoto, M., Tokutani, R., Mine, H., Tsumura, A., Kimura, C., Nakayama, Y.	４．巻 10(2)
２．論文標題 The factors associated with the attitudes of nurses working in medical facilities towards family nursing	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Open Journal of Nursing	６．最初と最後の頁 171-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4236/ojn.2020.102011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Nakayama Y, Hori M, Kawahara T, Sou H, Yamazaki A.	4．巻 9(8)
2．論文標題 Translation and Validation of the Japanese Version of the Family Sense of Coherence Scale-Short Form in Nurses.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Open Journal of Nursing	6．最初と最後の頁 901-910
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4236/ojn.2019.98067	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Nakayama , Hori M, Kawahara T, Yamazaki A
2．発表標題 Translation and Validation of a Japanese Version of the Family Sense of Coherence Scale
3．学会等名 The 14th Asia Pacific Sociological Association (APSA) Conference,（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 Hori M, Kikuchi R., Soeda A., Odatsu K., Murata A., Buyo M., Matsumoto M., Tokutani R., Mne H., Tsumura A., Kimura C., Nakayama Y, Yamazaki A.
2．発表標題 Nurses’ Attitudes towards the importance of families and related factors in Japan’s Hospitals
3．学会等名 The 22st East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 隍智子，菊池良太，山崎あけみ
2．発表標題 家族看護実践に影響を与える要因に関する国内外の文献検討
3．学会等名 第25回日本家族看護学会学術集会
4．発表年 2018年

１．発表者名 津村明美，副田明美，尾立和美，城真美，牧田彰一郎，武用百子，峰博子，木村千里，隍智子，安里舞子，菊池良太，山崎あけみ
２．発表標題 施設内研修とケース検討会・退院支援カンファレンス等を連動させながらの現任教育の可能性
３．学会等名 第25回日本家族看護学会学術集会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yamazaki A, Tsumura A, Mine H, Soeda A, Odatsu K, Kimura C, Buyo M, Kikuchi R, Hori M
２．発表標題 Developing a case conference for community-based family nursing care with consideration for cooperation with local areas
３．学会等名 Mixed Method International Research Association Asia Regional Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 津村明美，武用百子，木村千里，牧田彰一郎，峰　博子，菊池良太，山崎あけみ
２．発表標題 地域密着型・困難な家族についての連携ケース検討会の企画・運営方法の検討
３．学会等名 日本家族看護学会第24回学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 木村千里，津村明美，峰　博子，武用百子，菊池良太，山崎あけみ
２．発表標題 地域完結型医療のための多職種・多施設協働型家族看護ケース検討会の基盤となる要素
３．学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 峰博子
２．発表標題 A病院で実施した家族看護研修の反応・理解度の評価　ジェノグラム・エコマップを用い、事例を通して考える研修
３．学会等名 第48回日本看護学会（看護教育）学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 Tsumura A, Kimura C , Mine H, Soeda A, Odatsu K, Makita S, Hori M, Yamazaki A
２．発表標題 Case-study results of the training of hospital nurses involved in family nursing-Changes in the frequency of direct and indirect nursing care for the family
３．学会等名 13th International Family Nursing Conference（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Sou H, Hori M, Yamazaki A, Kikuchi R, Nakayama Y
２．発表標題 Nurses’ Attitudes towards the importance of families and related educational factors in hospitals,
３．学会等名 The 6st International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yamazaki A, Hori M, Kikuchi R., Soeda A., Odatsu K., Murata A., Buyo M., Matsumoto M., Tokutani R., Mine H., Tsumura A., Kimura C., Nakayama Y.
２．発表標題 Relationship between the individual characteristics of mid-level Japanese nurses and the families’ importance
３．学会等名 The 14stInternational Family Nursing Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 5）津村明美，城　真美，牧田彰一郎，武用百子，峰　博子，木村千里，安藤冴子，野崎恵子，菊池良太，山崎あけみ
２．発表標題 4種類の連携から考えるケーススタディ研修の企画・運営方法
３．学会等名 第26回日本家族看護学会学術集会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	武用　百子 (BUYOU MOMOKO) (00290487)	和歌山県立医科大学・保健看護学部・臨床教育准教授 (24701)	
研究分担者	峰　博子 (MINE HIROKO) (60450235)	地方独立行政法人大阪市民病院機構大阪市立総合医療センター（臨床研究センター）・臨床研究センター・看護師 (84427)	
研究分担者	木村　千里 (KIMURA CHISATO) (60520765)	首都大学東京・人間健康科学研究科・准教授 (22604)	
研究分担者	津村　明美 (TSUMURA AKEMI) (90595969)	静岡県立静岡がんセンター（研究所）・その他部局等・研究員 (83802)	
研究協力者	菊池　良太 (KIKUCHI RYOTA)	大阪大学・医学系研究科・助教	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	隍　智子 (HORI MOTOKO)	大阪大学・医学系研究科・博士前期課程	
研究協力者	副田　明美 (SOEDA AKEMI)	豊後大野市民病院・看護部長	
研究協力者	尾立　和美 (ODATSU KAZUMI)	大分赤十字病院・緩和ケア認定看護師	
研究協力者	松本　美幸 (MATSUMOTO MIYUKI)	岸和田徳洲会病院・副看護部長	
研究協力者	村田　亜夕美 (MURATA AYUMI)	前橋赤十字病院	
研究協力者	徳谷　理恵 (TOKUTANI RIE)	大津赤十字病院　・がん看護専門看護師	
研究協力者	牧田　彰一郎 (MAKITA SYOUICHIROU)	静岡県立こども病院	
研究協力者	城　真美 (JYOU MAMI)	日本赤十字社和歌山医療センター・家族支援専門看護師	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	川原　妙 (KAWAHARA TAE)	大阪大学・医学系研究科・博士後期課程	
研究協力者	中山　祐一 (NAKAYAMA YUICHI)	大阪大学・医学系研究科・博士後期課程	
研究協力者	安里　舞子 (YASUZATO MAIKO)	大阪大学・医学系研究科・博士後期課程	
研究協力者	安藤　冴子 (ANDO SAEKO)	大阪大学・医学系研究科・博士前期課程	
研究協力者	野崎　恵子 (NOZAKI KEIKO)	大阪大学・医学系研究科・博士前期課程	
研究協力者	宗　皓 (SOU HIKARU)	大阪大学・医学系研究科・博士前期課程	